なんだろう？

牛や馬にこれを引かせていたんだよ。どんな使い方をしていたのかな。



農耕

浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・
日原町歴史民俗資料館・飯南町歴史民俗資料館・
浜田郷土資料館・安来市立歴史資料館・平田本陣記念館など

大床鋤（おおどこすき）

解説

田の荒起（あらお）しのときに、牛に曳（ひ）かせて使用する鋤で、鋤床の長いものが古いとされます。

うつりかわり

現在の姿

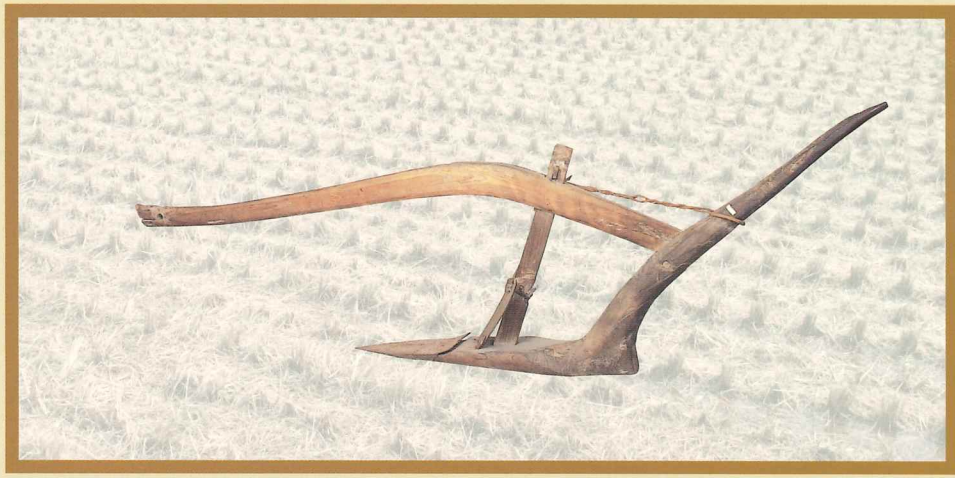
「長床鋤（ながどこすき）」から「中床鋤（なかどこ）」、そして「短床鋤（みじかどこ）」へと鋤き床の長いものから短いものへと変遷（へんせん）し、昭和30年代頃から機械化が進み、「耕運機（こううんき）」、そして「トラクター」へと大型機械化が進んできました。

荒起し用の鋤

使われた年代：大正末期まで

使用した人々：農家の人々







とくちょう

この鋤を牛に曳かせて田の荒起しをします。

なんだろう？

改良（かいりょう）されて形は変わったが、今でも農家で使われているよ。



飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館・
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

鍬（くわ）

解説

主に畑や田を耕（たがや）すための道具であり、農作業には欠かすことのできない基本的な農具といえます。写真右は一般的に風呂鍬と呼ばれ、木製の台に柄がついていて先端部分に鉄製の刃がはめ込まれています。台座が木製のためこわれやすくなっています。鉄製品の普及により刃全体が鉄製のものに変わっていきました。写真左は窓鍬といいます。刃に穴があけられており、軽量化され使いやすくなっています。また、作業中に土が鍬につきにくいという利点もあります。

うつりかわり

現在の姿

広い圃場（ほじょう）などでは耕運機やトラクターなどが使用されますが、機械が入らない小さな田畑や畦塗（あぜぬ）り、畑の草削りなどには現在でも鍬は使用されています。風呂鍬・窓鍬以外も作業の種類や土壌の硬さのよって平鍬・畝（うね）田鍬・爪（つめ）鍬などを使い分けます。

農地を耕す道具



使われた年代：1910年～現在まで

使用した人々：一般農家





とくちょう

鉄製のくわ先をうちこむことで農地を耕すことができます。

なんだろう？

緒が付いているので足に履くみたいだけど、どうやって使ったのかな。



農耕

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

大足（おおあし）

解説

大足は、田下駄ともいいます。元肥（もとごえ）を軟らかくした水田に踏み込んだり、田植え前の水田をくまなく歩き、植物の茎などを踏み込んだりします。また、小さい水田は牛が入って代掻（しろか）きをすることができないので、大足を履いた人が、整地をしました。大足の先の部分には、紐（ひも）が取りつけてあり、手で紐を引きながら足で大足を前へ送りながら進みました。

うつりかわり

現在の姿

大足と同じ形の木製品が、弥生時代の遺跡から出土していますので、大足は古くから水稲耕作に深く結びついていると考えられています。昭和20年頃までは、木製の大足しかなかったのですが、後には、下駄に鉄製の板を取りつけたものも見られるようになりましたが、農業機械の普及と水田の改良により姿を消しました。

水田を平坦にならす道具



使われた年代：1950年代まで

使用した人々：一般農家の人



とくちょう

足にはき、水田を踏み歩くことで、水田を整地します。

なんだろう？ 農耕用に飼っていた牛に付けていたようだけど、どうやって使ったんだろう。



農耕

飯南町民俗資料館・玉作資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

馬鍬（まぐわ）

解説

田植えの季節を迎えると、犁（すき）を使って水田の荒起（あらお）こしをした後、水を張り、代掻（しろか）きをおこないます。代掻きのときに、牛に引かせたのが馬鍬です。人が支え持ち、牛が引いて水田を歩くことによって土を軟らかく砕き、平坦（へいたん）にすることができます。馬鍬の幅や穂（歯）の長さも、田の土質や浅い深いにより、さまざまなものがありました。代掻きは、荒代掻き、植え代掻きなどと数回にわたってすることにより、苗を植えるのに条件の整った水田となっていきます。

うつりかわり

現在の姿

農業機械の普及により、馬鍬で代掻きをする光景は見られません。現在では、代掻きの終った後、トラクターなどに木材や梯子（はしご）を取りつけて引き、田植え前の水田を平らにならす農家もあります。

水田の代掻きに使う道具



使われた年代：1950年代まで

使用した人々：一般農家の人



とくちょう

牛にひかせて代掻きをすることができます。

なんだろう？

木のぼうのはしっこになにかぶらさがっているけど、どういう使い方をしたのかな。



農耕

たま

解説

昔の稲作は、苗代（なわしろ）で苗を育てることから始まります。ここで育った苗を抜いて小束（こたば）にし、しろかきの終った水田に移して植えます。「たま」は、苗代から掻（か）き終った水田へ苗を運ぶ道具で、水切りの良いカズラなどで作られていたが、縄製のものもありました。苗代でとった苗の小束を、二つのたまに積み上げてテンビン棒でかつぎ、あぜ道を運びました。

うつりかわり

現在の姿

たまは、上がり下りや段差のひどい山間地の棚田などには不向きで、主に平らで足場の良い水田で使われました。昭和40年代からは、育苗器やビニールハウスによる箱苗が普及し、たまなどの使用は全く無くなりました。

稲の早苗を担いで運ぶ用具



使われた年代：1960年代まで

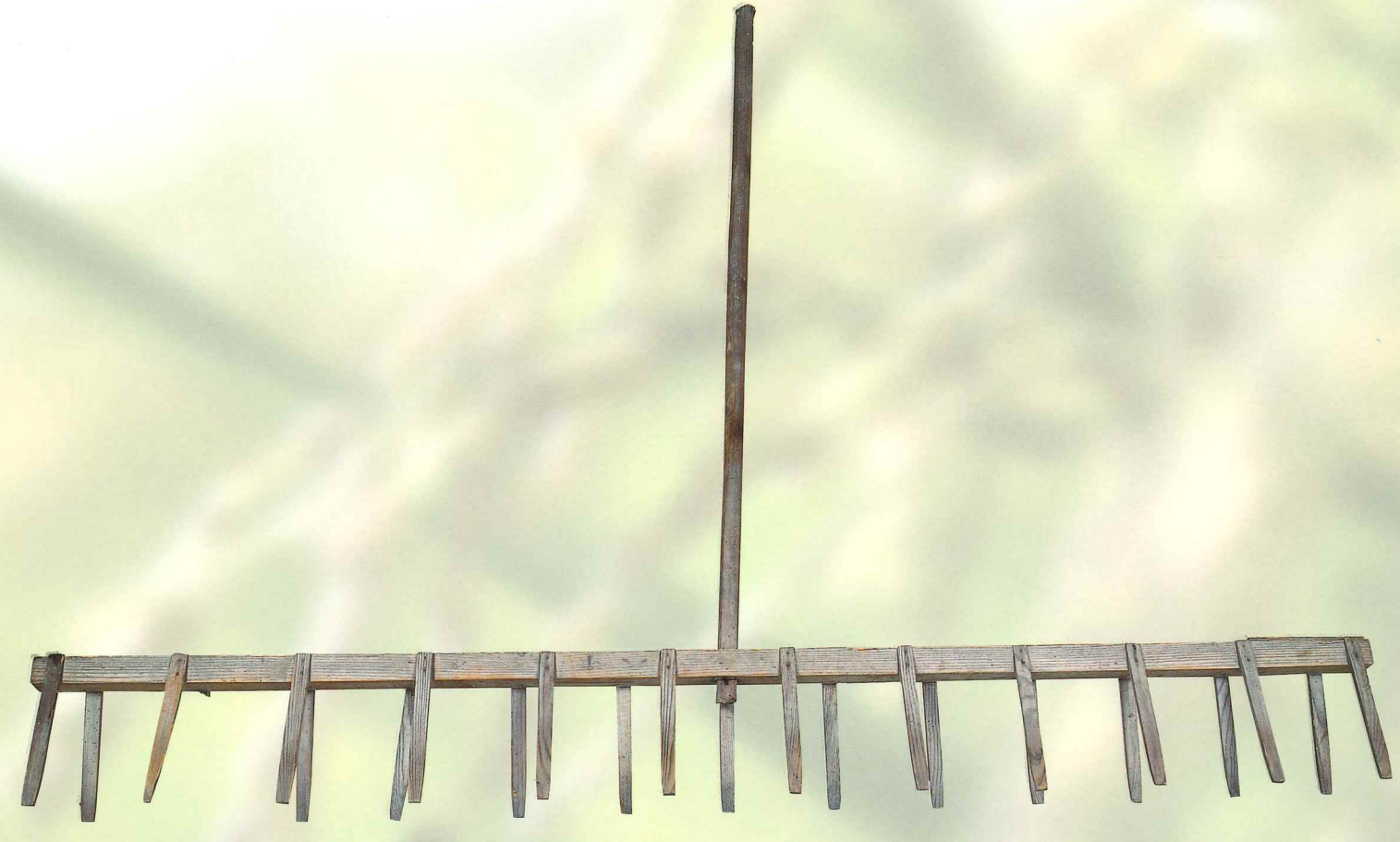
使用した人々：一般農家の人



とくちょう

稲の苗を運ぶ道具です。

なんだろう？ 足がたくさん付いているね。どうやって使ったんだろう。



農耕

飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

ばばひき

解説

稲苗をまっすぐ等間隔に植えるために、これを引いて水田に線を引きました。すじつけともいいます。最初、水田に綱(つな)を張り、その綱にばばひきの端を合わせて基準としました。縦横両方向に引き、直角に交わった交点に苗を植えていきます。同様に等間隔に稲苗を植える道具として、田植綱、田植枠(わく)がありました。田植綱は綱に等間隔の結び目などの目印があり、そこに植え付けをします。田植枠は、木製の枠で、三角形や六角形のものがあり、水田を転がすと跡がつくようになっていました。

うつりかわり

現在の姿

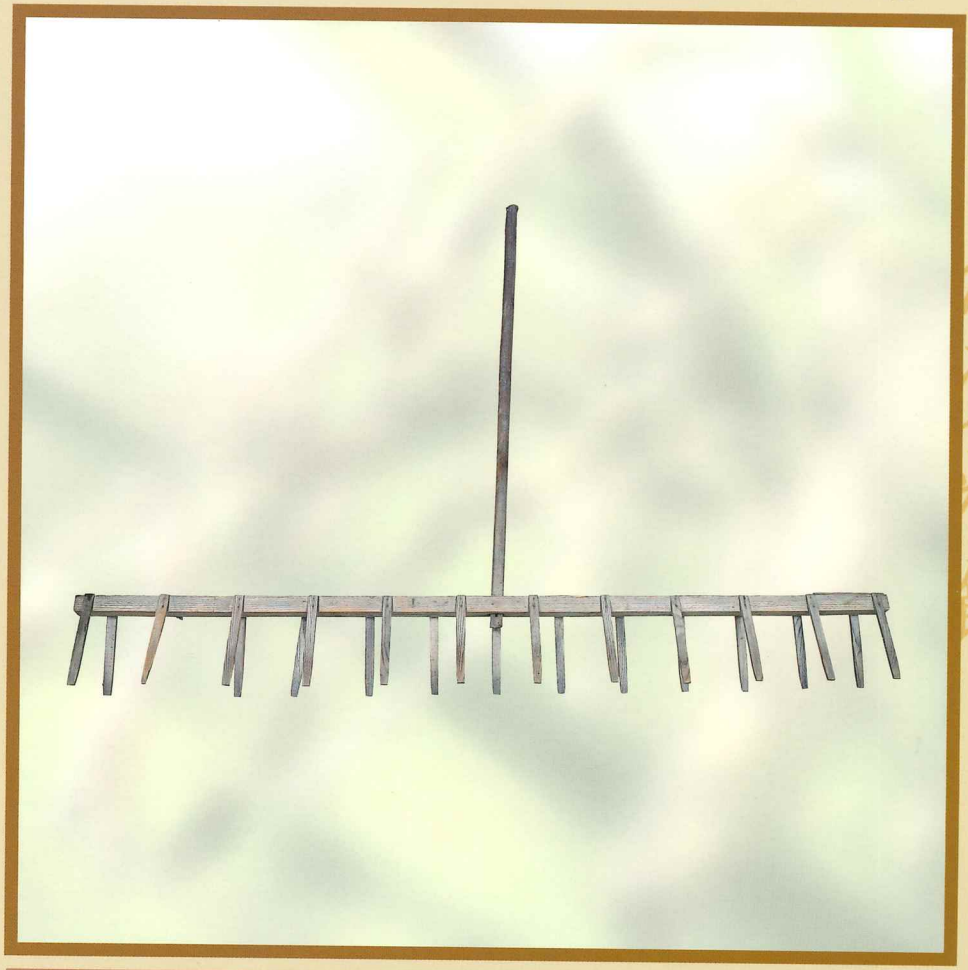
昭和50年代頃から動力による田植機が普及し始め、あらかじめ水田に目印を付ける必要がなくなり、ばばひきなどは姿を消しました。ばばひきや田植枠の使用は、田植を共同作業でおこなわず、各家でおこなうようになった昭和のはじめ頃からといわれます。

田に苗を等間隔に植えるためのもの



使われた年代：1970年代頃まで

使用した人々：一般農家の人



とくちょう

苗を植える前に人が引き、水田に線をひくことができます。

なんだろう？

ある農作業のとき使った牛の「晴れ着」なんだよ。あるときっていつだろう。



飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

農耕

花鞍（くら）

解説

牛供養（くよう）・花田植（はなたうえ）などの行事に用いられた鞍です。鞍は着色などをして飾られ、幟（のぼり）には家紋（かもん）が描かれました。花田植は、大田植えともいわれ、田植えが始まる最初に行なわれた大掛（おおが）かりな田植え行事です。地区内の牛を総（すべ）て集め、田に入れて一列に並んで代掻（しろか）きをしました。列の先頭を歩く牛を「さいうし（じ）」といい、この牛を使う人は、代掻きの指揮者でした。田をまんべんなく回り、列を乱さず先導（せんどう）する技量（ぎりょう）が求められ、これを務（つと）めることは名誉なこととされました。

うつりかわり

現在の姿

現在は、牛供養、花田植えとも一般的には行なわれていないため、花鞍を見ることはなくなりました。伝統行事の継承（けいしょう）を目的として近年、花田植えを復活させているところもあります。

代掻きのとき牛につける飾りの鞍



使われた年代：1930年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

お祝いのときにつかわれた特別な鞍です。

なんだろう？

一枚の板に約20本の釘（くぎ）が打ってあって、これを押して歩くんだよ。



田んぼの除草用具

使われた年代：大正末期頃まで

使用した人々：農家の人々





とくちょう

田んぼの草取りの道具で、体の前方で両手で押して使用します。

農耕

浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館など

八反ずり（はったん）

解説

一日の仕事量が八反（80a）の範囲の田の草取りが出来る、画期的（かっきてき）な除草機（じょそうき）です。一連用、二連用、三連用があります。八反ずりの田んぼの土の接地面は、一枚の板に釘（くぎ）が20本均等（きんとう）に打ってあり、この釘が田の草の根に引っかかり草が抜けました。改良されたものには、平たい鉄製の鋲（びょう）が8本交互に並び、草の茎を抜きました。

うつりかわり

現在の姿

「八反ずり」が使用されだすと田の草取りの労力（ろうりょく）も軽減（けいげん）されましたが、これを更に改良して「田車（たぐるま）」という除草機が登場しました。しかし、昭和50年代頃からは田の草を除草剤で枯らすようになってからは姿を消していきました。

なんだろう？

木の板にひもだけで裏に歯は付いていないけどなんだろう。



浜田市金城民俗資料館など

農耕

田下駄（たげた）

解説

この下駄は、稲刈りの時に湿田（しつでん）で使用します。下駄の歯はなく、一枚板の台に葛（かずら）を通して鼻緒（はなお）としています。刈り取った稲株を踏みしめ湿田にはまり込まないために使用します。主に自家製です。材質は杉の板を使用します。

うつりかわり

現在の姿

「田下駄」は農業の機械化に伴って、使用されなくなりました。したがって、「田ぐつ」という長い丈のゴム製の田靴に替わっていきました。

田んぼで履く下駄



使われた年代：昭和10年代頃まで

使用した人々：農家の人



とくちょう

湿田の稲刈りをするときに足が埋まらないように、この下駄を履き農作業します。

なんだろう？

長い歯が一列に並んでいるようだけど、どんな使い方をしたのかな。

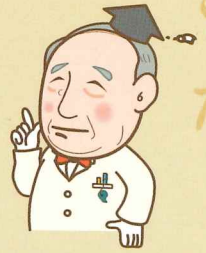


浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館など

農耕

千歯（せんば）

稲を脱穀する道具



使われた年代 大正末期

使用した人々 農家の人々

解説

稲を刈り取ってから脱穀（だっこく）するときに使いました。歯の本数が21本と多いことから千歯と呼ばれました。



とくちょう

稲の脱穀に使用する道具です。歯と歯の間に稲を入れて脱穀します。

うつりかわり

現在の姿

「千歯」から機械化されて「足踏（ぶ）み千歯」が登場して飛躍的（ひやくてき）な発展を遂（と）げました。さらに機械化された「脱穀機」の登場で効率がアップしました。平成時代になると大型機械で乗用の「コンバイン」が主流となりました。

なんだろう？

大きくてどっしりしているよ。上のものを回して作業していたんだけど、何だろう。



農耕

浜田市金城民俗資料館・飯南町民俗資料館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館など

木唐臼（きどうす）

解説

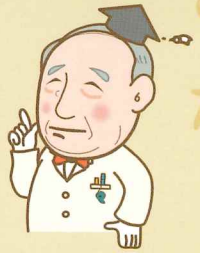
籾（もみ）を木唐臼に掛け玄米（げんまい）にする道具です。臼は下臼と上臼があり、下臼はふんばりが良いように四方に15cm幅の安定する台がついています。また、下臼には挽（ひ）いた米が一箇所に集まって落ちるバライという道具がついています。上臼は両横に10.5cmの引きガセの受板があり、引きガセに二人、臼に一人の、三人で作業する重労働でした。

うつりかわり

現在の姿

「木唐臼」は大型の樹木を必要としていましたが、これに替わるものとして「土塘臼」が造られました。昭和20年代からは、機械化された「籾摺機（もみすりき）」に替わっていきました。

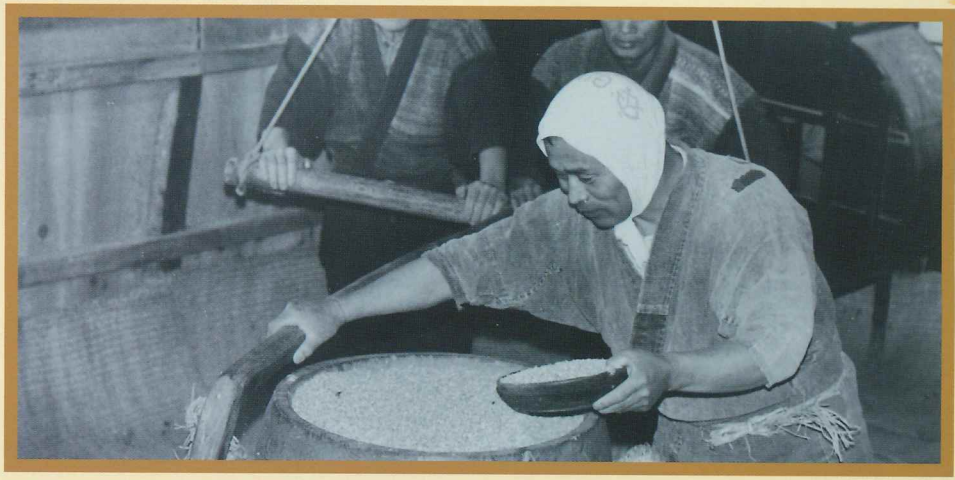
籾摺り道具



使われた年代：大正末期

使用した人々：農家の人々





とくちょう

松の大木を使って臼としています。かせを掛けて挽き回し、籾を摺（す）り玄米にします。

なんだろう？

右側の丸い部分に風車（扇風機）が付いているんだよ。

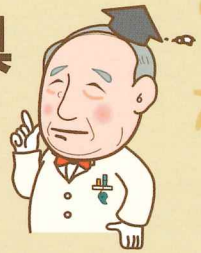


農耕

日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館・平田本陣記念館・飯南町民俗資料館・
浜田市金城民俗資料館など

とうみ

風を送り米とチリを選別する道具



使われた年代 1980年頃まで

使用した人々 農家

解説

とうみは、内蔵されている風車を手で回して風をおこし、その風力で穀類の調整や選別をする道具です。臼(うす)でひき落とした籾(もみ)を、籾殻と米に吹き分けたり、クズ米の選別や雑穀の混ざりものを除くことなどに広く使われました。これらの作業は、「とうみだて」といい、主に女性の仕事でした。明治初期頃に、とうみを持つ農家は少数で、ほとんどが「筵(むしろ)あおち」とか「あおち」という羽根をばたつかせる器具で、用をたしていました。



とくちょう

稲や雑穀の脱穀や調整の時使います。

うつりかわり

現在の姿

手回し(てまわ)器具に直接取りつけられた内蔵羽根は大型で、その操作にはかなりの労力を必要としました。昭和初期には歯車による増幅が、昭和20年代にはVベルト車による増幅が工夫されて、風車は小型になり、その取り扱いは楽になりました。昭和初期から普及し始めた脱穀機や籾摺機(もみすりき)には、この「とうみ機能」が組み込まれており、現在はほとんど使用されていません。

なんだろう？

四角の箱と、丸い棒の組み合わせ。どうやって使うのかな。



農耕

飯南町民俗資料館・平田本陣記念館・松江郷土館・
日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館など

ます

解説

主に米の分量を量るもので、写真は一斗桝です。一斗桝四杯で、米俵一つ分に相当します。昔は、米の分量を重さではなく体積で量かり、年貢や小作料は米を桝で計量して納めていました。桝の上にのっている円柱状の棒は、「とかけ」とか「とぼ」といって、桝に盛られた米を平らにするものです。とかけを引くときには力を入れず、すーっと引きました。できるだけ桝に入る米を少なくしようとした工夫です。

うつりかわり

現在の姿

現在、米は重さの単位を用いて取り引きされるのが普通で、桝に変わり量りでの計量になっています。ご飯を炊くときには、一升とか五合とか嵩の単位を使いますが、桝で量り取っている家庭は多くはないでしょう。今は、プラスチックの容器などがこれに代わっています。

米の量をはかる道具



使われた年代：1970年代頃まで

使用した人々：一般の人々



とくちょう

一斗分の米を量ることができます。

なんだろう？

たくさんある小径木片（しょうけいもくへん）は8個で一組になっているけど、どうやって使っていたのかな。



日原町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・
安来市立歴史資料館など

農耕

こませとつつろ

解説

こませは木製で、木の又で作った二本の足に、俵の寸法を刻んだ板が渡してあります。また、つつろは、小径木を適当な長さに切り、中央が最も細くなるように削り込んであり、一組が八個あります。俵を編むときは、俵の大きさごとに切った四本の小縄を二重にし、両端からつつろに巻いた後、こませに振り分けに掛け、これに稲藁をあてて編み始めます。俵の大きさは、四本の小縄の長さと、こませに刻まれた、つつろを掛ける切り込みの位置により決まります。

うつりかわり

現在の姿

米、又は籾俵の他、櫨俵や炭俵、菰等もこれで編みました。使い始めは何時の時代か分かりませんが、昭和30年代、米俵がカマスや、紙袋に代わるまでは、農家の重要機具の一つでした。炭俵は茅の茎で作るため、硬くて折返しに苦労しましたが、昭和20年代に炭俵専用のこませができ、楽になりました。

米俵・炭俵・菰を編む道具



使われた年代 1950年代頃まで

使用した人々 農家の人々



とくちょう

俵やコモを編む道具です。

なんだろう？ 長いひも（縄）がたくさんぶら下がっているね。この道具で何をするのかな。



農耕

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
邑南町郷土館・安来市立歴史資料館など

むしろ機（ばた）

解説

農家の必需品（ひつじゅひん）である敷物（しきもの）の「むしろ」を編む道具です。むしろは、農家の敷物で、特に囲炉裏（いろり）の間の敷物として重宝（ちょうほう）されていました。農作業をするときには道具・用具の敷物として、穀物（こくもつ）の天日乾燥（てんぴ）時には敷物として用いました。各農家に一台は、むしろ機がありました。

うつりかわり

現在の姿

昭和30年代からは、住まいの形態（けいたい）も変わり、屋内での敷物は茣蓙（ござ）や畳に替り、農作業にも「むしろ」を使用しなくなったので、「むしろ機」は自然と消滅していきました。

むしろを編む道具



使われた年代：昭和20年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

藁製のむしろを編む道具です。

なんだろう？

長い刃が付いているよ。どうやって使うのかな。



農耕

浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・
松江郷土館・飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・
浜田郷土資料館など

押切（おしきり）

解説

昔は、「押切」で藁を4～5cmの長さに小さく切って牛に餌として与えていました。麻や楮の木を一定の長さに切って「こしき」で蒸し、皮を剥ぐためにも「押切」で裁断していました。

うつりかわり

現在の姿

「押切」に代わるものとして現在では、「電動鋸」があります。

藁や木を何本もまとめて切る道具



使われた年代：昭和20年代頃まで

使用した人々：農家の人々

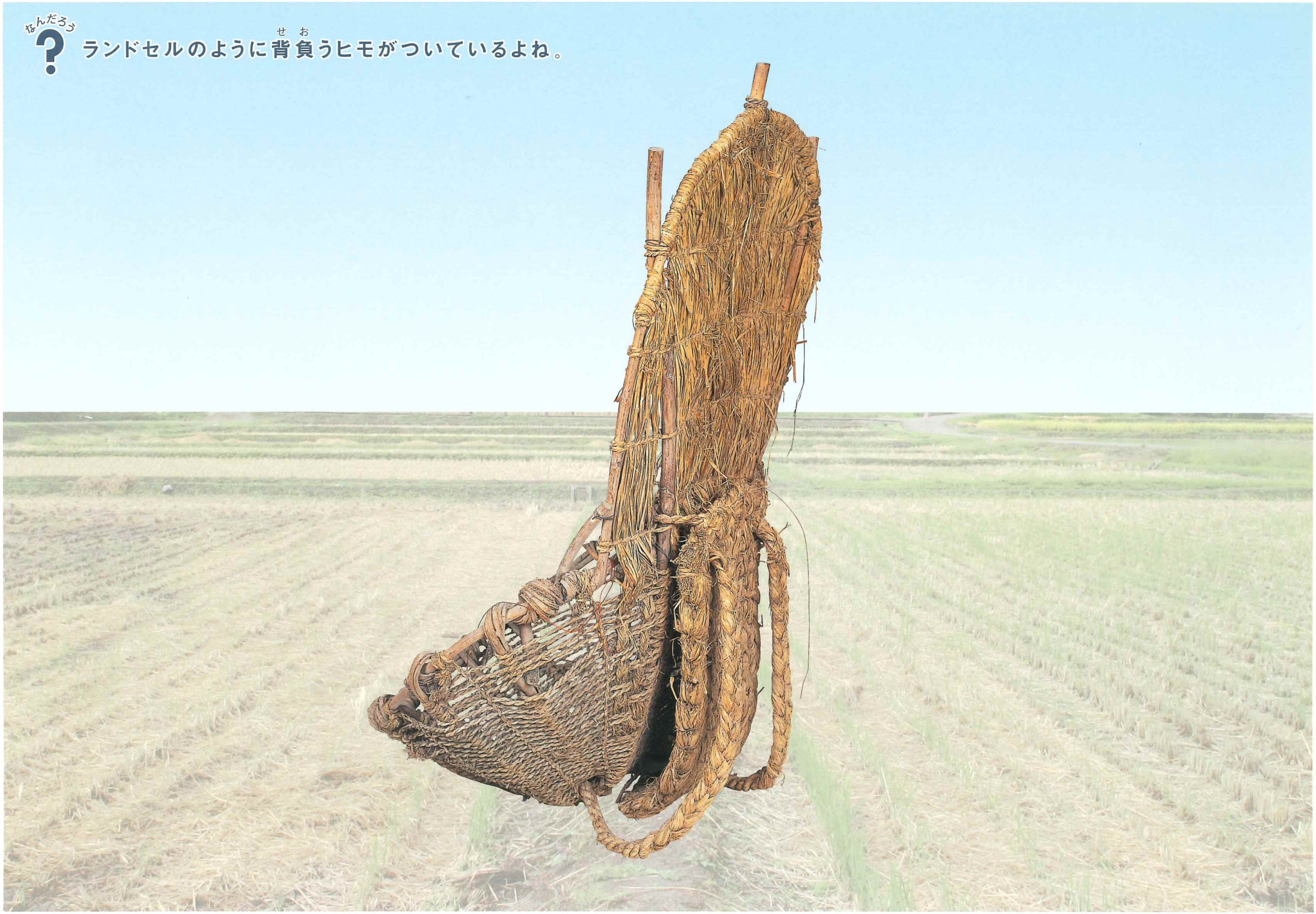


とくちょう

藁、麻、楮などを一定の長さに押して切る道具です。

なんだろう？

ランドセルのように背負うヒモがついているよね。



飯南町民俗資料館・邑南町郷土館など

農耕

おいこ

解説

竹や細い木を骨とし、縄や藤かずらなどを編んで作った円形の籠状のものに、背負い紐と藁の背あてを取り付けたもので、「もくおいこ」ともいいます。おいこの背中を背負ったままでも体を傾けるだけで堆肥が落とせるように籠があらかじめ斜めに取りつけてあります。おいこの網目を密にし、土を積んでも漏れないようにしたものを「つちおいこ」といい、土を背負って運ぶおいこに「どろおい」という木製箱型のおいこもあります。

うつりかわり

現在の姿

小規模に堆肥や土を運搬するときは、手押しの一輪車で行なうことが多くなり、ほとんど使用されなくなりました。堆肥や土を人力で運搬する機会も少なくなり、運搬車などで行なう場合が多くなりました。

堆肥や土を運ぶ道具



使われた年代：1960年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

堆肥を田にまくため、おいこで運搬しました。


なんだろう？
口が大きくて投げ入れるのに適(てき)しているんだ。何だろう。

日原町歴史民俗資料館など

農耕

ほぼろ

解説

ほぼろは、稲藁をコモ編みにして作ったカゴ形の入れ物です。縁から渡した綱弦がありその綱弦の中央に木の枝又などで作った大きなカギがついていることが特徴です。地上でも使われましたが、ハゼの実や柿などを収穫するときに、このほぼろを樹上に持って登り、近くの幹や枝にカギを掛けて吊るし、収穫物を投げ入れました。これが一杯になると、長い綱に吊るして地上に下ろしました。家の中では吊るして、小物入れなどに利用されました。

うつりかわり

現在の姿

ほぼろが最も使われたのは、櫨の実の収穫時です。櫨とりは樹上の仕事なので、この道具がないとできませんでした。櫨の実が収穫されたのは、昭和10年代頃までで、その時期を過ぎるとほぼろは柿や柚など収穫に使われていましたが、次第にその姿を見せなくなりました。

柿の実を採る時に使用した藁製の籠



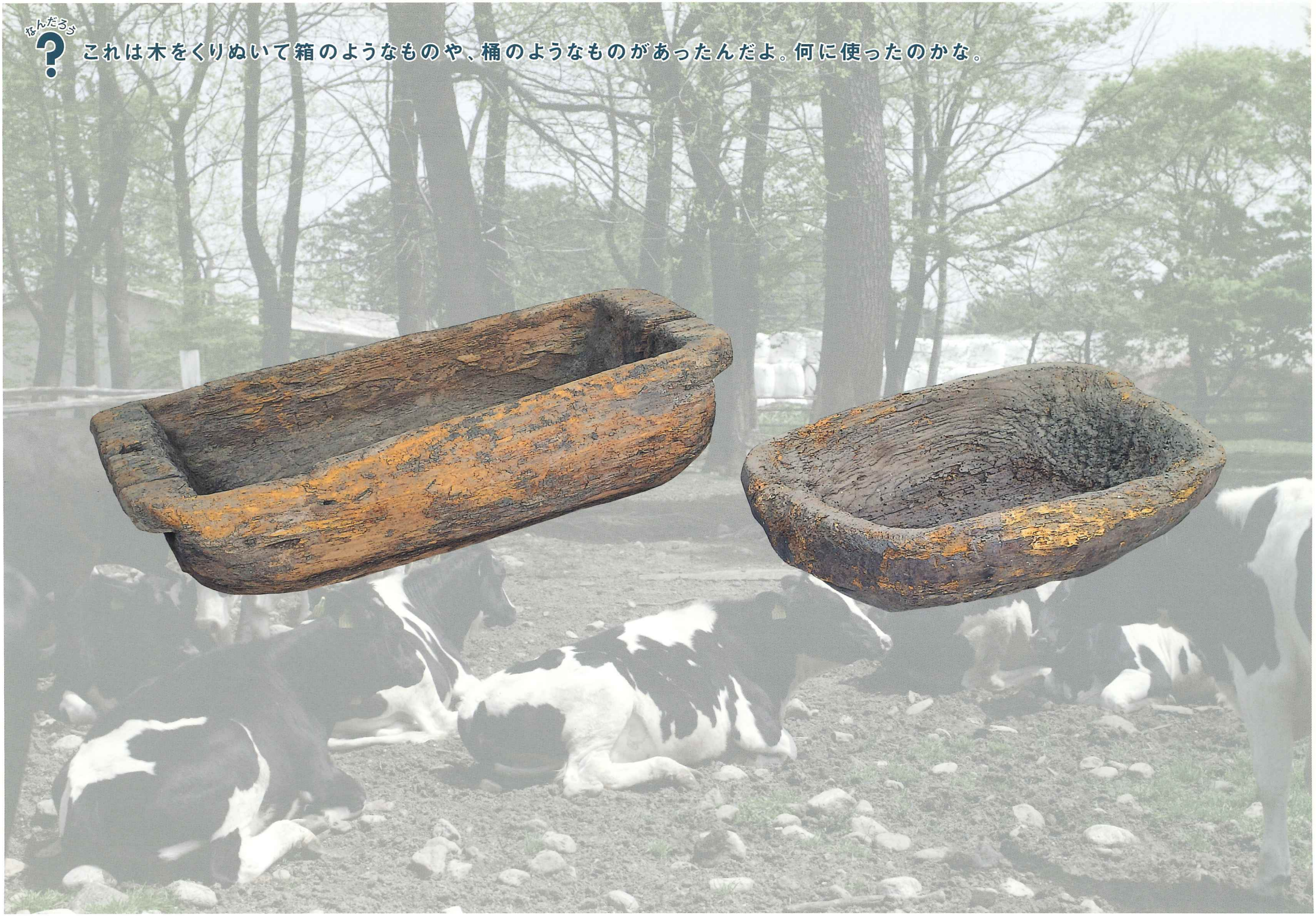
使われた年代：江戸期より1940年代頃まで

使用した人々：農家の人



とくちょう

稲藁製のカゴ状の道具で、樹上で収穫時に使うのに適しています。


なんだろう？
これは木をくりぬいて箱のようなものや、桶のようなものがあったんだよ。何に使ったのかな。

浜田市金城民俗資料館など

農耕

飼馬桶（かいばおけ）

解説

大きい方は成牛用、小さい方は子牛用の餌（えさ）用の桶です。材質は栗の木で、中を刳り貫（くぬ）いています。牛や馬一頭につき一つの飼馬桶で、一回に食べる分量の餌を入れていました。

うつりかわり

現在の姿

丸木を刳り貫いて造った「飼馬桶」は、長方形の「餌盥（えさたらい）」、または円形の餌盥の「飼盥（かいだらい）」へと替りました。

むかししまね資料館

牛・馬の餌箱



使われた年代：昭和20年代頃まで

使用した人々：農家の人々



とくちょう

牛や馬の一回分の飼料をこの桶に入れます。

なんだろう？ 牛や馬の背に付けて使っていたんだけど、なんだろう。



農耕

浜田市金城民俗資料館・島根県立博物館・邑南町郷土館・
日原町歴史民俗資料館・浜田郷土資料館・
安来市立歴史資料館・松江郷土館・飯南町民俗資料館など

荷鞍（にぐら）

解説

昔は、農家は、家畜（かちく）として牛馬両方を飼育（しいく）していました。特に牛は役牛（えきぎゅう）として農閑期（のうかんき）に荷鞍を付けて鉄穴場（かんなば）から、たたら場まで、砂鉄を運んでいました。馬は毎朝、草刈山から芝草や薪（まき）を運搬しました。また、砂鉄の運搬も行っていました。

うつりかわり

現在の姿

「たたら」の衰退（すいたい）で、牛馬による運搬（うんぱん）の手段が必要でなくなったために、荷鞍は使用されなくなりました。

牛・馬の背に付ける荷物を載せる鞍



使われた年代：明治 末期

使用した人々：農家の人々





とくちょう

牛馬の背に付けて鞍の両側に荷物を載（の）せ運搬するのに重宝（ちょうほう）でした。